NPO法人加治川ネット21情報紙

水辺のひろば

No.22
2015年10月1日発行

檻に捕獲された猿。発信機をつけて行動を調査

現地調査前に鳥獣害の説明を受けて

鳥獣害の実態を学ぶ

檻や電気柵で猿害に対応

加治川ネット21では、新発田市でも深刻な問題となっている鳥獣害の実態を広く住民に知ってもらおうと、6月7日に鳥獣害研修会を開催しました。

新発田市の担当職員の猿害に関する説明では、サルは母系集団のため、単に数を減らそうと闇雲に駆除をすることは、その集団を分断し、別々の集団を作ることにつながりかねません。そのためサルの生態を充分に把握した上で、個体管理をし、どのような対応をしていくか、生態や環境にどのように配慮をしていくのかを探りながら、対策をとることが重要となるそうです。

関係する地域の人たちが猟友会の協力により檻を設置してサルを捕獲したり、電気柵の設置をしたり、また、サルの群れが里山に近づかないように生息エリアを移動させるため、集落に近い森の木を伐採したりということを行っています。

研修会では、実際に山間部に連なる電気柵の状況、サルの生息エリアとなる森の木の一部伐採、檻の設置などを見て回りました。

現在新発田市で山間部に張り巡らされた電気柵

（次ページへ続く）

は今後も増え、近々総延長は48kmにもなるそうです。

実際に現地で電気柵やサルの捕獲用の檻を見ると、猿害に悩まされる農家の苦労が垣間見られます。しかし、鳥獣害の対象はサルだけではありません。今回電気柵の状況も見学しましたが、張り巡らされた電気柵の外側には、イノシシの足跡やクズの根を掘り起こした跡がいくつも確認されました。

クズの根があちらこちら掘り起こされて

本来、イノシシは短足動物で雪に弱く、雪国には来ないといわれていたそうですが、実際は新潟県に入って来ており、上越や柏崎では大変な被害に遭っています。

幸いにも新発田市では、猿害対策のための電気柵がイノシシの侵入防止の有効な手段としても機能しています。もし、これが無ければ、今頃はあちらこちらでイノシシ被害が確認されていると思われます。

里山でのこういった取り組みにより、町の中心部にまではイノシシの被害が及んでいないわけですから、鳥獣害の防止や対策というのは、実は新発田市全体の問題ということになります。このことを知っている市民は決して多くありません。今後も継続して、このような研修会を実施し、啓発活動に協力していけたらと考えています。

板山川で釣果上々
川東小の環境学習

7月14日、川東小学校4年生の環境学習・生き物調査が行われました。場所は小学校区内の板山川で、朝から気温が30℃以上に上昇する中、34名の子供たちが下羽津地区の地蔵橋に集結しました。

今回の生き物調査に先立ち、一週間前に大きめのペットボトルで各班2個ずつ魚捕獲器を作成し、それを前日に橋のたもとから下流に仕掛けました。

当日は、最初に班の代表者に川の水質を調べてもらった後、仕掛けたペットボトルの捕獲器を引き上げました。ドジョウやアブラハヤ、カマツカなどもかかっていました。餌を多く入れすぎて魚に敬遠された捕獲器もありましたが、予想よりは多くかかっていて釣果は上々でした。

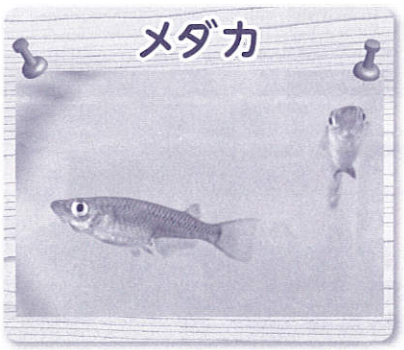
何かいるかな？ 網を入れてガサガサ

川に入り、草むらに網を入れてガサガサ追い立てます。絶滅危惧種のスナヤツメやホトケドジョウもいました。流れに足を取られて思わず尻餅をついたり、思いのほか大きな獲物に驚いたりと、学校の外での授業はなんであれ楽しいものです。先生の声を振り払うように児童たちはどんどん先に進みます。今回調査した板山川は浅い流れのあるところの川でしたが、ドジョウがたくさん捕れ、トノサマガエルや羽黒トンボのヤゴも見つかりました。

同校は農村地帯の中の小学校ですが、川に入った経験のない児童も結構いました。暑いさ中でしたが良い経験となったのではないでしょうか。

シリーズ

田んぼや川の生き物②



メダカは加治川流域にはまだたくさん生息していて、田んぼの用水路やため池などでもふつうに見られますが、環境省からは絶滅危惧種、新潟県レッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されています。失われつつある里山・里地のもっとも身近な生き物の象徴として指定されたようです。

メダカは実は海にいるダツ、サヨリの仲間でダツ目に属します。よく見ると頭が平らで受け口ですし、少しくらいの塩分は全く平気です。全長は3㎝程度で自然界での寿命は1年程度ですが、じょうずに飼育すれば2　3年は生きています。

産卵期は水温が20℃程度に上昇する5　6月で、雌が粘着性の卵をお尻にぶら下げているのを見ることができます。その後、卵を水草にからめ、卵は1週間程度でふ化します。

メダカの飼育は簡単で、卵から親まで飼育・観察できる貴重な魚です。しかし飼えなくなったからと、採集場所のわからないメダカを近くの川などに放流することは絶対にしないでください。

放流したメダカと地元のメダカが交雑することにより、地域の自然環境に合わせて進化してきた遺伝子組成が壊されてしまうかもしれません。また、それが原因で地域の個体群が消滅する可能性もあるからです。

ふるさとのメダカは放流して守るのではなく、生息環境を保全することで守りたいものです。

ック新潟、大進電業㈱、㈲ひかり電工、㈱ミトモ電設、ベック㈲、新発田ガス㈱、菊水酒造㈱、㈱馬場工務店、㈱小池組、㈱静岡グリーンサービス、聖光園㈲、
潟グリーンテック、高橋基礎屋㈲、昭栄印刷㈱、若月建設㈱、川東土地改良区、豊浦郷土地改良区、大豊電気㈱、高橋土建㈱、小柳労務管理事務所

大きな鯉も確認
古太田川生き物調査

8月9日、佐々木地域内・古太田川で、生き物調査がありました。これは「古太田川環境保全協議会」が毎年夏に実施しており、当会から講師やスタッフを派遣し、一緒に活動しています。活動主体は地区青年部と子供会で、水位を下げた古太田川を青年部が江浚いを行い、その後、大人と子供でどんな生き物がいるのか、網ですくい、生き物を探します。

大人たちが川幅一列に並んで魚を追い込みます。なにやら水面に動く大きな影が…、鯉です。とても大きな鯉がいます。頭から尻尾の先まで80㎝はあるでしょうか、そして丸太のような太さです。網の枠がしなり折れそうなくらいの大物で、バシャバシャと暴れながら捕獲されました。

他の網の中にはザリガニやニゴイ、カマツカなども獲れました。さらに追い込み漁を続けると、大小いろいろな生き物が獲れ、両新田集落センターに戻り、種類別に分けてみます。鯉、オイカワ、鮒、タイリクバラタナゴ、ヤリナタナゴ、カマツカ、アブラハヤ、ヌカエビ、ミズカマキリ、絶滅危惧種のマツカサガイやマシジミで11種ほど確認できました。

古太田川はＣＯＤ調査では数値が6～7以上ですが、中流域にいるアブラハヤがいるなど、多種類の生き物が生息するなかなか良い川のようです。集落の中を蛇行しながら流れて、川戸も家々に残されていて、今も生活と共にある川という印象を受けました。

大人たちが追い込む網の先に鯉の姿が

夏は、自然体験で成長
水辺で遊び、知る、水辺の大楽校

加治川ネット21が実施する水辺の大楽校は、川での体験を通して、川の恵みと危険、生き物たちと人の関係、川の役割などを学び、子供たちの感性を育もうというものです。子供たちの体験ワークショップとして、当会の事業の柱の一つにしているものです。

今年は7月25日に受託事業としてイオンチアーズクラブの、8月1日には当会主催事業として開催しました。

イオンチアーズクラブの大楽校は、参加の子供たち約70名の大人数。前日までの雨天のために滝谷森林公園や川での活動は断念し、会場を変更しての活動となりました。

会場は特別支援学校竹俣校の体育館で、周りに田んぼの自然が残っている場所です。生き物調査、苔玉造り、竹を使った水鉄砲作り、紙竹とんぼ作りなどで楽しみました。大勢の子供たちで体育館は熱気がムンムン。このエネルギーを川遊びで発散させてあげられなかったのは、少し残念でした。

翌週8月1日の主催事業は、うって変わり炎天下の中での川遊びがメーン。待望の加治川での活動で、子供たちは皆いきいき。川にさえ入っていれば、いつまでも遊んでいます。自然こそが先生ですので、大人たちはきっかけ作りとフォローするだけ。

本来は、準備などにも子どもたちが参加すると、より体験型の活動になるのですが、住んでいる地域も違い、集まる時間的余裕もないため、当会の担当者が中心になって準備します。準備し過ぎると子供たちをお客様扱いしてしまうこともあるので、ともに学ぶという姿勢を大切にしたいものです。

人気の手作り水鉄砲で遊ぶ子どもたち

環境豆知識 Vol.19
カーボン・オフセット

私たちは経済活動や生活に、電気や水、自動車を使いますが、使用される電気の一部は火力発電所で天然ガスや石炭を燃やして作られています。また、水も浄水場で電気やガスを使ってきれいにしています。自動車はガソリンを燃やして走ります。経済活動や生活によって、直接または間接的に二酸化炭素を排出しているのです。この排出される二酸化炭素を、植林・森林保護等の事業を行うことで吸収しようという考え方を「カーボン・オフセット」と言います。

企業が自社の活動により排出される二酸化炭素の量を算出し、排出削減の努力を行ってもどうしても排出されてしまう二酸化炭素の量を、排出権(クレジット)として購入し埋め合わせるものが一般的です。

今年7月に、「ハードオフコーポレーション」が「トキの森クレジット」を購入したことが報道されていましたが、これも「カーボン・オフセット」です。

小学生環境学習パネル展

と　き：平成27年11月7日(土)～15日(日)
ところ：イオンモール新発田店2Ｆ
内　容：新発田市、聖篭町、胎内市の小学生の環境学習成果をパネルにまとめたもの
主　催：NPO法人加治川ネット21

NPO法人 加治川ネット21団体会員紹介（順不同）

曽根建㈱、㈲みずほ園芸、㈱アートグラフィ
エヌシーイー㈱、㈱花安 新発田斎場、㈱新

失われた宝物②

消える砂浜、枯れる松林
白砂青松は死語に!?

1964年の東京オリンピックを契機に日本は高度経済成長を続け、生活の豊かさも相まって海洋レジャーが盛んになって行きました。新発田地域においても夏は絶好の海水浴シーズンで、どこの海も大賑わいを見せていました。当時の浜辺は長く遠く、海辺まで走って行くには嫌になるほど砂浜が続いていました。

今はどうでしょうか。海岸線に行ってみれば分かりますが、目と鼻の先に海辺が広がっています。特に印象的なのが次第浜。ここの浜辺も、以前は行き着くまで砂浜を幾つも越えて行かなければならないほど、遥か遠くにありました。今では考えられない風景です。

砂浜は、豊かな生態系を育み、レクリエーションの場を提供してくれると同時に、波のエネルギーを弱める「減災」機能を持ち合わせています。砂浜は、山から川、そして川から海へと供給される土砂により、長い年月をかけ形成されてきました。しかし、明治時代以降の近代化や高度経済成長の中で、土砂災害を防ぐための砂防事業や治水・利水のためのダム建設、港湾建設などにより、土砂の供給が遮断され、砂浜の侵食が進行しました。

次第浜は そういう意味では特徴的です。加治川の治水工事とダム建設、さらに東港の港湾開発によって土砂の供給が減り、さらに潮の流れによって削られるという影響を受けた場所です。砂浜侵食が生じると、波のエネルギーを弱める機能が失われ、堤防などの構造物を安全に維持できなくなるだけでなく、生態系などの環境面や砂浜の利用面においても悪影響があると言われています。

山と海を結ぶ回廊である河川がもたらした豊かな海岸線、その海岸線に帯状に続いている防風林としての松林、これらの景観をして白砂青松と私たちは呼んでいます。しかし、海岸浸食と松食い虫による松の立ち枯れ、伐採、そして温暖化による海面上昇の影響も加わり、「白砂青松」の将来は危ういものとなっています。

消え行く砂浜、それは子供達にとってどのような未来に繋がるのでしょうか。砂浜の消失は国土保全ということからみても大きな問題ですが、少なくとも、テクノロジーと経済活動の進化が、景観の保全に役立つことを願って止みません。

（S・K）

寄稿 殿様街道てくてく旅 ⑮

古河のまちから着々と江戸へ

2011年の秋の旅もあちらこちらに寄り道しながら少しずつ進んで行った。古河 ── 「こが」というのが正しい。うかつにも「ふるかわ」と思い込んでいた ── に入った時、まちの造りに何となく違和感を覚えた。昔ながらの古い町並みの横に新興住宅っぽい家々、レトロ風に作った一角に最先端風なビル、この不統一な有様はここに限らず新発田でもどこでも、日本中似たような状態だと思うが、ここの違和感がどれも造成の途中といったふうな中途半端さで終わっていること。

そんな事をふと立ち寄ったお茶屋のご主人と話し、すっかり話がはずんでしまった。てんでばらばらの古河の町づくりの事、地方都市の持つ問題など、美味しいお茶を出してくれながらご主人は熱心に話す。

美意識の無い無秩序な町づくり、経済優先か自然優先か二者択一しかない選択肢の貧しさ、私は無力だし難しいことは分からないが、こうしてずっと歩いて来て確かに感じることは、東京へ近づけば近づくほど、まちが無節操で雑然としていることだ。整備しようと開発すると却って不統一感が目立ってしまうのはなぜだろうか。

それでも救われるのは、見知らぬ我々に通りすがりに挨拶をしてくれる少年少女や、声をかけてくれる古老達がいたこと。古河の茶屋のご主人は天保14年の古河の古地図をコピーして分けてくださった。行く先々で偶然お会いした方達だけでもかくも優しい。まだまだ捨てたもんじゃない、と思う旅の日々である。（恵）

「てくてく旅」は加治川ネットの有志が、参勤交代で殿様の歩いた街道を歩き歴史を感じようと、2007年から会津を目指し少しずつ歩き始めました。「会津」到着後、折角なのでと「江戸」へと歩みを進めています。

《編集後記》

今年の8月は例年以上の暑い夏でした。夏休みに入ると加治川に向かう県道を自転車で進む中学・高校生らしき隊列がよく見られました。彼らは上岡田の「天然プール」へ向かっているのでしょう。

気の合う仲間たちと連れ立って、加治川の川原へ涼を求めて行き交う子どもたちの姿が、今年も多く見られました。

ひとしきり泳いだ帰り路、安全橋たもとの伊藤酒店のお休み所で、ジュースやアイスを買って一休みしていく子供たちの姿は、昔から見られた光景です。最近は、途中にいくつもコンビニができてしまったので、その姿が少なくはなってしまいましたが。

昼下がり、このお休み所に来て加治川の水面と入道雲のわく二王子山と青空を見ていると、子供の頃の夏休み気分を思い出します。

夏に限らず、ちょっと休みたい時は、どうぞここで一服を。

（H・S）

NPO法人加治川ネット21の紹介

設　立	1996年11月。2003年5月法人化
活動目的	21世紀を生きる子どもたちによい環境（自然、伝統、文化）を残し、伝える。
主な活動	水と親しむ水辺の大楽校、生き物調査、小学校環境学習支援、川辺や町並み散策、手前みそ作り、シンポジウム開催 など
受賞歴	環境大臣表彰、新潟県環境賞、「日本の水をきれいにする会」会長表彰ほか
年会費	法人会員10,000円、個人会員2,000円